

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	多様な主体の連携・協働／交流
手法名	バイオマス資源を活かした里山再生活動による人の集う場づくり
主体	東京農業大学短期大学部環境緑地学科
背景(地域の課題)	<p>高齢化の進む里地里山地域においては、保全活動を展開していくためには外部との交流の活性化も重要な要素であると言える。</p> <p>そこでは従来からの観光による誘客にとどまらない「保全型ツーリズム」ともいべき農林業を生かした体験活動をベースにした保全活動の展開が求められている。また、これらの取り組みからの新たな里地里山の景観が形成されたり、定住人口の増加につながるなどの波及効果も期待されている。</p>
手法／方策の詳細	<p>地元の活動者との出会いを契機にして農林漁業の営みを大事にした取組みを軸に交流活動を実施している。活動内容としては、学科の特性を生かして谷津田と里山をフィールドにしながら田園風景の保全・再生に取組むとともに地域に人が集うことができる場づくりを行っている。</p> <p>(1)館山での整備・再生活動－自然生態園づくり－ 村中心部に位置する里山の館山において定期的な学生の訪問と交流活動の中でバイオ資源を生かした再生整備に取り組んでいる。</p> <p>① 景観保全活動におけるワークショップ(図1) 景観保全ワークショップを開催し、地元の子どもの意見も取り入れた公園づくりの基本構想を作成。</p> <p>② 調査(図2) 現状の植生をバルーンによる上空からの写真撮影などを行いながら詳細に調査。</p> <p>③ 計画図の作成 調査を元に自然生態園としての計画を作り、植栽の計画を立てる。</p> <p>④ 施工(図3・図4) 大学の実習授業等を利用して、手作りでの施工を行う。スギ・ヒノキなどの間伐を行い、搬出するとともに皮むきをして簡易施設の材料とする。池を造成したり植栽を行っていく。伐採作業など高度な技術が必要なものは森林組合や地元の方などに協力いただく。また産出する木材等は地域のバイオマス利用施設などにも提供され、本取り組みの中でも炭焼き窯が設置された。</p> <p>⑤積み重ねられる新たな計画と施工 施工の進捗状況によりながら、木道や橋、柵を設置するなど人が集いやすい施設整備を順次進めていく。</p> <p>(2)田んぼの学校の活動 (1)の活動のほか、学生ボランティアを募り、定期的に村を訪れ、村内の谷津田において、地域の農業の営みに寄り添いながら、田植え、田の草取り、稲刈り、収穫祭まで村人との交流を行いながら取り組んでいる。</p>
手法・技術的視点	<p>大学の学科の知識や技術を生かしながら、村との交流を通じて授業としての学びを深めるだけでなく、実際に現地の里地里山の保全整備事業にかかわり、地域環境の向上と一緒に汗を流しながら寄与している点が注目される。</p> <p>また、正規の授業とボランティアと両面から学生たちを募ることで、定期的に村を訪問し絆を深めており、学生OBである社会人も継続的に取組みに参加しサポートするといった状況になっている。こうしたことが活動の信頼性を一層高めているとともに、地域ファンの増加につながっていることにも着目される。</p>

<p>実行プロセス・運営体制のイメージ</p>	<p>(1) 鮫川村の農林業の営み</p> <p>これら暮らしと生業の営みがそのまま交流活動の構成要素となる。</p>  <p>(2) 館山におけるバイオマス資源を生かした整備再生のステップ</p> 
<p>図・写真資料</p>	<p>図1: 子どもたちのアイデア</p>  <p>図2: バルーンによる調査と計画図作成</p>  <p>図3: 施工(間伐と木材搬出)</p>  <p>図4: 施工(池づくりと植栽)</p> 
<p>参考資料</p>	<p>平成24年度里なび研修会in福島県パワーポイント資料(入江彰昭氏)、「里山の自然とくらし福島県鮫川村」(東京農業大学短期大学部生活科学研究所編)</p>